

# オンラインによる被災地学習支援について

塚本光夫\*・ハツ塚一郎\*・大塚芳生\*・黒山竜太\*・太田恭司\*・浦川健一郎\*

## Online learning support for a disaster area in Kumamoto

Mitsuo Tsukamoto, Ichiro Yatsuzuka, Yoshio Ohtsuka, Ryuta Kuroyama,  
Yasushi Ohta and Kenichiro Urakawa

(Received October 1, 2021)

In July 2020, heavy rain caused enormous damage to school facilities, equipment, and communication environment in the southern part of Kumamoto Prefecture. The online learning support, therefore, was provided as support for the disaster area. The purpose of this report is to clarify the significance, characteristics, advantages, and problems of online learning support. From consideration of the significance of learning support, teacher training and learning support for mental care of students are necessary. From these backgrounds, the online learning support is provided by organizations of university students and graduate students for the purpose of providing a place for learning. The background, preparation, and operational status of learning support are described. Then, the advantages and problems of online learning support are clarified.

School safety and disaster prevention education are important, and in order to implement and maintain them, it is necessary to create a system of faculty and staff, committees, etc. Online learning support has the advantage of being able to participate casually regardless of location, but it has problems such as difficulty in communication. It is necessary to act to make university students and graduate students interested in the activity and to provide them with information such as the purpose of the activity.

**Key words :** online, learning support, tablet pc, disaster area

### 1. はじめに

令和2年7月豪雨では、2020年7月はじめからほぼ1ヶ月にわたる豪雨により、日本全国に多くの人的被害、住家被害、建物被害等が生じた。熊本県南部地域では、学校の施設・設備、通信環境等に甚大な被害が生じた。そこで、被災地支援の一つとして学習支援という方策を実施することとした。ネットワーク環境の整備が進み、ネットワーク対応の情報端末が普及するとともに、オンライン会議システムの利便性が高くなっている現状を考慮すると、オンラインによる学習支援の方法は、新型コロナウイルス感染に対する懸念を払拭し、遠隔地への支援も容易となる。そこで、本報告の目的はオンライン学習支援の意義・特性・利点・問題点について明らかにすることとする。

本報告では、まず被災地支援のあり方としてオンラインによる学習支援の意義について検討し、特に児童生徒の心のケアへの教員研修や学習支援の必要性を言及する。それらの背景から学習の場を提供するという目的から大学生および大学院生の学生組織が主体となって実施するオンライン学習支援を実施する

こととし、学習支援にいたるまでの経緯や準備、実際に実施する場合の運営状況などについて述べる。このような背景に基づき実際にオンライン学習支援を実施し、どのような利点や問題点があるのかについて明らかにすることとした。

### 2. 被災地支援のあり方

#### 2.1 フェーズに即した支援

災害被災地に対する支援について、過去事例を踏まえながら概略と要点を整理し、今回の活動の位置づけと意義を整理する。被災地支援は災害の規模やその影響、当該地域固有の事情に即して実施されなくてはならない。しかし多くの災害では、短期・中期・長期という基本的なフェーズが共通する。

短期のフェーズは、発災直後の緊急救援段階である。人命救助と救急救命医療、通信交通の確保やライフラインの復旧など、初期の支援には高度な専門性が要求される。

中期のフェーズは、緊急時に連続する「救援段階」<sup>2)</sup>である。開設された避難所の持続的な運営、在宅避難を含めた被災者の

\* 熊本大学大学院教育学研究科

状況把握、水や食料をはじめとした生活物資の運搬と配給など、被災者の生活支援に多くの資源と労力が必要となるのがこの段階である。

ボランティアなどの民間支援はこの段階からその役割と重要度を増す。特に、行政機関自体が大きな被害を受けるような状況では、住民個々のニーズ把握と細やかな支援提供にボランティアの貢献は不可欠である。ボランティアのこうした機能は阪神・淡路大震災（1995）を契機に広く認識されるようになった。

長期のフェーズは「復興段階」<sup>2)</sup>である。避難所から仮設住宅への移行、さらに住宅再建や復興住宅の建設など、被災者の安定した暮らしのための、より長期的な支援が必要となるのがこの段階である。仮設住宅などの独居者の見守り活動や個別の生活支援、さらに、復興まちづくりへの住民参画など、地域コミュニティの再生支援を視野に入れた長期的なスパンでの支援もこのフェーズに含まれる。

今回報告する実践は、救援段階から復興段階にかけての移行期にまたがる長期的な活動であったと整理できる。次に、担い手であるボランティアの観点から支援活動の特徴を整理する。

## 2.2 心のケアとボランティア

阪神・淡路大震災や東日本大震災（2011）を通して被災者支援の中核に位置づけられるようになったのは心のケアである。当初は医療や臨床心理の専門家が担うものと位置づけられてきたが、現在では、幅広い人々がそうした知識を共有し、被災者を支える豊かな体制を築く重要性が指摘されるようになった。

ボランティアは、被災者と広く交流しコミュニケーションを担う点で、心のケアの一翼を担う存在である。しかしそれ以上に、ボランティアの多様な活動そのものが、被災地および被災者の心の支えともなっている点に着目する必要がある。

たとえば東日本大震災や近年の豪雨災害の被災地では、被災者の水没し損傷したアルバムや写真を救出し復旧する活動が展開されている。被災者にとってかけがえのない心の拠り所を取り戻すためのこうした地道な取り組みは、ボランティアの力とその発想によって生まれ、継承されてきた。

ボランティアは、このように不可視化されていた領域や潜在的な課題を顕在化させ、支援の新たな対象とし、災害救援のあり方そのものにも影響を及ぼす。すなわちボランティアは、単に無償の労働力ではなく、被災地と被災者に寄り添い、災害救援のあり方を変革する積極的な主体でもある。熊本地震（2016）における福祉避難所開設などの被災弱者支援、ペット同伴避難所開設などの新しい取り組みにも、過去の災害におけるボランティアの活動とそこでの課題発見が大きく影響している。最後に、これらの観点を踏まえて本実践の特徴と意義を整理する。

## 2.3 教育と情報を通じた支援

令和2年7月豪雨を受けた今回の活動は、子どもと教育、端的には中学生の学習支援を対象とした、学生ボランティアによる活動である。教育支援は、被災児童生徒に対する支援、また

被災した学校施設および教職員への支援として、多くの災害において重要な意義をもつ。熊本地震においても、避難所となった学校に学生を派遣する支援の活動が展開された。

重要なことは、学習支援が、単に学校支援・教育支援という以上の意味を持っている点である。学習の支援は、そこでなされるコミュニケーションや見守りを通して、被災により傷ついた子どもに対する心のケアともなっている。同時に学習支援は、生活再建や復興に労力を向けなくてはならない保護者の負担を軽減し、わが子の学習や進学の支援ともなるという点で、保護者とその心の安定に対する支援の役割も果たす。

長期的な視点に立てば、学習支援は、地域とコミュニティを支える人材の育成にもつながっている。子どもや若者の存在は、それ自身が地域に活力を与える。土地の歴史や文化を継承し復興を支える人材の育成という役割も教育支援は担っている。

今回の支援活動においては、コロナ禍という要因もあり、ICT技術を活用した、学生ボランティアによる遠隔学習支援という方法が選択された。翻ってみれば被災地支援は、その時々的情報技術の発展と連動し、相互に刺激を与え合う関係にある。阪神・淡路大震災は携帯電話の普及期であり、ボランティア同士の相互連絡にも携帯電話は広く活用された。東日本大震災はSNSの普及期と重なっており、ボランティア相互の連絡調整に加え、被災者からの直接的な発信が拡大することとなった。

本実践は、このような流れの延長上で、オンラインビデオコミュニケーションという新たな情報技術を被災地支援に援用した取り組みのひとつと位置づけられる。被災者の中学生と学生ボランティアとの間に新たなコミュニケーションの経路を設けたという点も、今回の実践の大きな特徴であるといえる。

他方で、コミュニケーションの手段が変わっても、支援とボランティア活動の本質は変わらないという点も本実践から確認することができる。「ボランティアは、多様な領域で新しいコミュニケーションを生起させる」<sup>3)</sup>のものであり、今回の取り組みもまた、最前線のICT技術を活用しつつ、ボランティアの本質に則って被災地との新たなコミュニケーションを模索、展開した事例であると整理することができよう。

## 3. 熊本県教育委員会との連携

### 3.1 被災地学習支援に至るまでの取組

令和2年7月豪雨における被災地支援を本学として実施することになり、令和2年7月8日教育学部・教育学研究学科教授会において第3執筆者が熊本県教育委員会との連携担当として任命された。そこで、第3・5・6執筆者と協議し、被災地支援について熊本県教育庁の市町村局長と事前打ち合わせを行った。その後、本学教育学部長が熊本県教育庁教育理事へ連絡し、被災地支援を行うことへの承諾を得た。

令和2年7月13日第1・第3執筆者は、熊本県教育庁教育理事及び教育政策課担当主幹から被災地の状況を聞き取り、新型コロナウイルス感染症により4月から休校であった球磨村立球

磨中学校3年生への支援及び被災地の聞き取り調査について依頼を受けた。その後、筆者らは新型コロナウイルス感染症や被災地まで遠距離である事等を考慮し、オンラインを活用した支援ニーズの聞き取りを八代教育事務所・八代市教育委員会及び八竜小学校、芦北教育事務所及び芦北町教育委員会、球磨教育事務所及び球磨村教育委員会に行った。また、球磨村では、認定NPO法人カタリバが被災した児童生徒の支援活動を行なっていたため、聞き取り調査を行った。

その結果、支援ニーズとして急性期における児童生徒の心のケアと球磨村立球磨中学校の学習支援があり、筆者らはこれらを行うことを決定した。

### 3.2 急性期の心のケア研修

被災地調査では、先の見えない新型コロナウイルス感染症に対応しながら、児童生徒や教職員の心のケアを手探りで指導している実態を把握した。また、被災地に支援に行きたくても新型コロナウイルス感染症の影響で支援に向くことが出来ない状況を直視し、オンラインで急性期における心のケア研修を実施することとした。本研修会日程等を表1に示す。

この時期は、熊本県教育委員会や被災した地域の教育事務所・市町村教育委員会・学校において、多忙を極める日々である。そこで、本研修の主催を本学とし、熊本県教育委員会には後援を依頼した。また、研修での挨拶を熊本県教育委員会に依頼した所、快く引き受けて頂き市町村局長にご挨拶をいただいた。さらに、被災地の状況報告についても、八代教育事務所・八代市教育委員会、芦北教育事務所・芦北町教育委員会の了解を得て、被災地の状況を報告として八代市立八竜小学校の校長と芦北町立吉尾小学校教諭に依頼した。

その他の発表についての選考基準を以下に示す。

平成28年熊本地震で震度7を経験した益城町立広安西小学校

表1 急性期の心のケア研修会日程等

1. 日時	2020年 8月 1日(土) 午前10時～11時30分
2. 接続方法	ビデオ会議システム「Zoomミーティング」
3. 対象	自治体教育委員会、教員、大学教職員 (1)主催者挨拶 学部長・研究科長 (2)2熊本県教育委員会挨拶 教育庁市町村局長 (3)報告 ・被災状況 八代市立八竜小学校 校長 ・熊本地震 益城町立広安西小学校 養護教諭
4. 内容	・認定NPO法人カタリバ ・芦北町立吉尾小学校 教諭 ・広島県安芸郡坂町教育委員会 課長 ・宮城県仙台市 ガイダンスカウンセラー ・兵庫県教育委員会 震災支援チーム EARTH
5. まとめ	熊本大学大学院教育学研究科

学校で児童の心のケアに取り組んだ養護教諭。

平成29年4月に益城町教育委員会・認定NPO法人カタリバ・熊本大学が連携協定調印式を行なっていることから、益城町教育委員会と繋がりのある認定NPO法人カタリバ職員。

平成30年7月豪雨で熊本県教育委員会学校支援チームが支援した坂町教育委員会。

東日本大震災を経験し、平成28年熊本地震で被災地支援活動を行なったガイダンスカウンセラー。

阪神淡路大震災を経験し、平成28年熊本地震で被災地支援活動を行なった、兵庫県教育委員会の震災支援チーム EARTH 隊員で心のケアチーム。

本研修会は被災者や支援者が参加しやすい日程として土曜日に設定し、58名が参加した。研修後、アンケート調査を行ったので、その結果を表2に示す。

本研修会の満足度は、まあまあ思うを入れると100%満足で、本研修会が「役に立つ」「この研修会でやってみたい取り組みがある」「わからなかったことをや疑問を解消できた」と回答した割合も90%であることから、本研修が研修者のニーズに沿った研修であったことが明らかとなった。また、被災体験者は63%で、被災した学校の勤務経験者は37%であったことから、今後の防災教育の必要性が感じられた。さらに、テレビ会議システムの利用について98%が好評価したことから、これからの研修にオンラインが有効であることが確認できた。

以上の結果から、心のケア研修会は有用な研修会となったと言える。急性期の心のケアは、DSM-5<sup>4)</sup>より、心的外傷的出来事から3日後～1ヶ月に症状が発現するASD(Acute Stress Disorder)

表2 研修後のアンケート調査結果

○研修会の内容に満足しましたか	
そう思う	94%
まあまあ思う	6%
あまりそう思わない	0%
そう思わない	0%
○本日の研修会で一番感じた、学んだことは何ですか	
役に立つと感じた	49%
この研修会を参考にやってみたい取り組みがある	22%
わからなかったことや疑問を解消できた	18%
その他	10%
○あなたはこれまでに被災したことはありますか	
はい	63%
いいえ	37%
○あなたはこれまでに被災した学校に勤務したことはありますか	
はい	37%
いいえ	63%
○テレビ会議システムを利用してどうでしたか	
とても良かった	73%
良かった	24%
普通	2%
○今後どのような研修を希望しますか	
心のケアについて	49%
学習支援について	31%
オンライン授業について	10%
避難所運営について	6%
その他	4%

の対処について教師が学ぶことは重要であると再認識した。また、今後の研修希望に「心のケア」のニーズが多いことから、球磨中学校のオンライン学習支援の際も心のケアを配慮した取り組みとする必要があることを確認できた。また、本研修の取り組みが、平成28年熊本地震で学んだ<sup>5)</sup>アンバーサリー反応に対するコーピングの研修に繋がった<sup>6)7)</sup>。しかし、本研修会の実施時期について被災地の参加者が少なかったことから、もう少し研修の実施時期を遅らせる必要があったのではないかと推察している。発災後の急性期に、心のケアは必要と感じているが、心のケアを考える余裕がないほど多忙な状況であることから、今後の課題として研修の実施時期や実施方法を検討する必要がある。

### 3.3 被災地学習支援の取組

#### 1) 連携パターン

##### ① 熊本県教育委員会との連携

熊本県教育委員会との窓口は、教育政策課の主幹や主任主事となる。県立学校の県立中学校・高等学校については、教育政策課に加え、高等教育課の主幹が窓口となる。県立特別支援学校については、教育政策課に加え、特別支援教育課が窓口となる。必要に応じて、教育理事や各局長、各課課長及び審議員と連絡を取り合う。

##### ② 教育事務所との連携

市町村学校に連絡取りたい場合は、教育政策課より各教育事務所に連絡される。教育政策課より、担当の指導主事等の紹介を得て、連絡を取り合うことになる。必要に応じて、所長や指導課長と連絡を取り合う。

##### ③ 市町村教育委員会との連携

教育事務所の指導主事等から、市町村教育委員会に連絡がされ、市町村教育委員会の担当者が紹介される。必要に応じて、教育長と連絡を取り合う。今回被災が激しかった球磨村教育委員会には、熊本県教育委員会より管理主事や指導主事が派遣されていたことを付記する。

##### ④ 支援する学校との連携

市町村教育委員会の担当者から、支援する学校の管理職が紹介される。校長は、担当者を決め、通常の連絡は担当者で行い、必要に応じて管理職と行う。特に、担当者で不安がある時は、躊躇せずに校長や教頭と連絡を取り合う事が連絡調整が上手くいくと感じた事を記す。また、支援する学校にたどり着くまでには、かなり時間がかかることを認識した。

#### 2) ボランティア学生の募集

今回は、全学の学生に対して Moodle を用いて募集を募った。しかし、学生が集まらないために、ボランティア学生募集のための球磨中学校学習支援プロジェクトオンライン説明会を3度行った。この説明内容を表3に示す。並行して、学部長はじめ教育学部及び教職大学院の先生方で学生ボランティアを募集した。教職大学院では、現職の院生も参加した。登録した学生は、

計27名であった。

#### 3) 球磨中学校3年生学習支援オンラインオリエンテーション

令和2年9月15日に支援する本学の学生及び関係教員と球磨中学校3年生及び関係職員の顔合わせ会をテレビ会議システムを活用して、表4の要領で行った。

第3執筆者は、球磨中学校で生徒がiPadを活用して、オリエンテーションに参加する生徒を支援しながら観察した。オリエンテーションが始まると、生徒は緊張した様子が見られたが、本学の学生の自己紹介が始まると、生徒の表情が次第に和らいでいった。本学生の学習支援する思いが、生徒に確実に届いている事を確認した。

表3 学習支援内容

目的	本大学と熊本県教育委員会の連携による令和2年7月豪雨で被災地支援活動として、球磨中3年生の学習支援を行う。また、本支援を通して、球磨中3年生の卒業後の進路保障につなげる。
説明会日時等	9月8日(火) 午後2時40分～午後4時10分 場所：1-C教室 及び テレビ会議システム
学習支援事前オリエンテーション実施日時等	9月15日(水) 午後3時10分～午後3時55分 生徒と大学生の顔合わせ会(テレビ会議システム)
学習支援期間	9月20日(日) 毎週日曜日 午後2時～4時
学習支援方法	・ オンラインによる学習支援とする。 ・ 熊本大学学生Zoomミーティングによるビデオ会議システムを用いて児童生徒の学習を支援する。 ・ 放課後の家庭での自習時間にビデオ会議システムで支援。 ・ 自習主体。わからないことがあれば、生徒は学生に質問する。 ・ 生徒に参加しやすいように参加する、参加し続けることができるようにする。

表4 オリエンテーション内容

#### ○5校時：事前準備等(14:15～15:00)

- ・ 学校からの簡単な説明(学年主任)
- ・ 熊本大学からの挨拶(大塚)
- ・ 事前練習等

#### ○6校時：生徒と大学生の顔合わせ会(15:10～15:55)

- ① はじめの言葉(塚本)
- ② 主催者挨拶(教育学部長)
- ③ 球磨中学校挨拶
- ④ 自己紹介(熊大生)
- ⑤ 球磨中生徒による自己紹介
- ⑥ 学習支援の進め方説明(大塚)
- ⑦ 終わりの言葉(塚本)

4. オンラインの活用

4.1 オンライン状況

熊本大学としては、主としてオンラインによる学習支援を実施することとした。この学習支援は熊本大学と熊本県教育委員会の連携による令和2年7月豪雨で被災地支援活動として、球磨中学校3年生の学習支援を行う。また、本支援を通して、球磨中学校3年生の卒業後の進路保障につなげる。オンライン学習支援方法の概略は以下の通りである。

- 熊本大学学部生Zoomミーティング等によるビデオ会議システムを用いて児童生徒の学習を支援する。
- 放課後の家庭での自習時間にビデオ会議システムで支援自習が主体。

4.2 使用システム

Zoom Video Communications, Inc.のZoomミーティング<sup>®</sup>を利用する。Zoomミーティングはオンライン会議システムの1つで、画像・音声インターネット回線を利用して通信することができる。また、画面共有による資料提示、チャット機能による文字通信、ブレイクアウトルームを利用したグループワークなどを行うことが可能である。Zoomミーティングには各種プランがあるが、熊本大学では2020年度より教職員に対して複数参加者でも時間無制限のライセンスを導入しているため、熊本大学大学院所属の教員がホストとしてミーティングをスケジュールし、ミーティングを起動することとした。

オンライン会議システムの利便性はインターネット回線に接続し、オンライン会議システムにアプリやWebブラウザがあれば、場所・距離を問わず参加することが可能である。

4.3 使用機器

大学教員ならびに学生は各自のパソコンを利用し、中学校生はLTE通信回線を利用できるiPadを利用した。被災地支援のため熊本市教育委員会は球磨中学校生に対してLTE通信回線を利用できるiPadを1人1台の割合で貸与していた。そこで、このiPadを利用して、生徒が自宅からオンライン会議システムに参加することができる。なお、2020年ははじめにはまだGIGAスクール構想<sup>⑨</sup>による1人1台の学習者用端末は実現できていなかった。

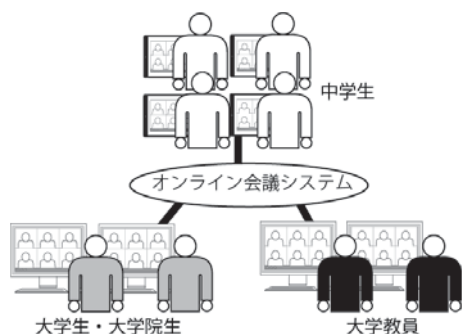


図1 オンラインが学習システムの概要

5. 被災地支援の取り組み結果

5.1 取り組みの様子

本オンライン学習支援プロジェクトには、以下の中学生及び大学生が参加した(表5)。初めての取組であることから、Zoomの機能を前提とした取組であることから、試行錯誤を繰り返しながら徐々に実施の形式を定めていった。当初は参加者全員が一画面に集まった学習時間としていたが、中学生からは質問がしづらいこと、大学生からは声掛けがしづらいことがあった。そのため、数回の実施を経てブレイクアウトルームの活用を検討し、中学生には【今日勉強したい教科】を、大学生には【教えることが可能な教科】をそれぞれ入室時に聴取し、マッチングを行なって小グループに分かれて実施するようにした。ブレイクアウトルームの利用形態を図2に示す。また、開始当初は学生の代表者らが開始時や途中休憩時に各自の興味のある話題を紹介(レクリエーション活動や手話など)して中学生の緊張をほぐす工夫を行っていたが、大学生が常に準備できるわけではなくなっていったこと、中学生の入室のタイミングが揃いづらくなったことなどから、そうしたレクリエーションの実施が難しくなっていき、入室後すぐに教科ごとのルームに分かれて勉強を始めてもらうような形に落ち着いていった。

活動時間帯も試行錯誤であった。中学生が授業を終え帰宅するまでに通学バスを利用することがほとんどだったため、当初は日曜の昼間2時間で設定していたが、全員が都合の良い時間帯というものを設定することは困難であった。また大学生にとってもあくまでボランティアであり他の予定が入ると参加できないこともあった。そのため、平日の夕方や土日の時間帯を試行しながら、最終的には11月末頃から金曜日19時~20時の1時間に定着していった。

そうして3月まで活動を続け、卒業式にはZoomで教室と接続して、大学生達からお祝いのメッセージを届けた。また、教育委員会教育長からお礼文を頂戴した。

表5 学習支援への参加人数

実施月	9	10	11	12	1	2	3	計
中学生	52	53	65	16	28	42	17	273
大学生	27	16	24	5	11	16	9	108

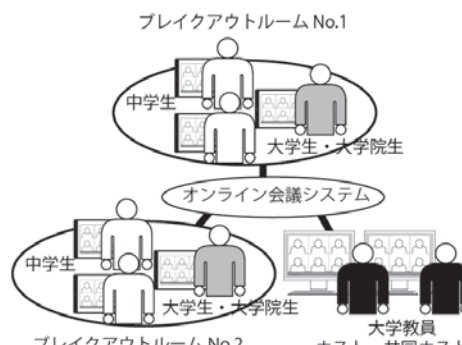


図2 ブレイクアウトルームを用いた学習支援

## 5.2 参加者による活動の評価

活動終了時に、Google form への回答及びインタビューによって中学生及び大学生に本プロジェクトについての振り返りを求めた。以下、項目ごとに結果の提示を行う。

### 1) オンライン学習への評価

【オンライン学習でタブレットを配布してもらってよかったか】という問いについては、中学生が3.85、大学生が4.0という高評価であり、LTE タブレットの活用は一様に役に立つという評価であった。また【オンライン学習が心のケア（心が落ち着くこと）につながったか】という問いについては、中学生が3.15、大学生が3.33 という評価であり、こちらも概ね高評価であった。

表6 オンライン学習への評価平均値

	中学生(n=34)	大学生(n=9)
オンライン学習でタブレットを配布してもらってよかった	3.85 (0.35)	4 (0)
オンライン学習が心のケア(心が落ち着くこと)につながった	3.15 (0.69)	3.33 (0.47)

※1（そう思わない）～4（そう思う）で評価、（）内は標準偏差

### 2) オンライン活用のメリット

【オンラインでよかったこと】という質問について得られた感想を集約したものを表7に示した。中学生では「大学生と楽しく学習できた」「普段あまり話さない人と話せた」といった新鮮な体験が得られたことや、「分からないことが聞けた」「勉強がはかどった」など学習に役立ったことへの感想が寄せられた。また「質問がチャット機能でできた」「顔を見せなくても勉強できた」といった感想もあり、チャット機能により質問を投げることができたことや顔出しを強制しなかったことは中学生にとって学習しやすさの要因となったことが窺えた。

また、大学生でも「見張られているというプレッシャーは少なかったのでは」「参加へのハードルが下がる」「場所を問わず気軽に参加できた」といった感想があり、現地にいかずとも活動に参加しやすいといったメリットが挙げられた。さらには「遠方でも見守りが可能」「時間を共有できた」「私の方が勇気や元気をもらった」といった感想から、支援に携われたという気持ちが表れていた。そして「何気ない会話ができる」「慣れてくると勉強以外の会話ができる」といった、学習以外の内容でのつながりに価値を見出した学生の感想もあった。

### 3) オンラインの課題

【オンラインで嫌だったこと・残念だったこと】という質問について得られた感想を集約したものを表8に示した。中学生では「もっと会話をしたかった」「参加者が少なかったこと」といった、より参加者同士の交流に期待したものや、「発言しにくかった」「わからないところが聞けなかった」「各教科の先生がいたらよかった」といった、より学習を深めたかったといった感想もあった。大学生でも「一対一で会話できるチャンスが少なかった」「関係づくりが難しかった」といった、中学生とより気軽に親密なつながりを期待した感想が挙げられ、また「相手の様子が見えないことで表情や態度がわからなかった」「書いて説明したいときに難しかった」「質問しづらかったのでは」といった実施構造上の課題に関する感想も挙げられた。

表7 オンラインでよかったこと

中学生(n=34)	大学生(n=9)
・大学生と楽しく学習できた	・遠方でも見守りが可能であるという点
・周りにいない大学生という人たちとしゃべることができた	・参加へのハードルが下がる
・普段あまり話すことのない色々な人と話すことができた	・時間を共有できたこと
・分からないところが聞けた	・顔を出さなくてもコミュニケーションがとれた
・質問がチャット機能でもできた	・ホワイトボードや画面共有機能を活用できた
・勉強がはかどった	・見張られているというプレッシャーは少なかった
・集中できた	・小グループに分けたことで質問しやすくなりよかった
・顔を見せなくても勉強できるところが良かった	・場所を問わず気軽に参加できた
・みんなでつながれた	・私の方が勇気や元気をもらった
	・何気ない会話ができることがよかった
	・慣れてくると勉強以外の会話ができるのが何よりよかった
	・コロナが流行している中でも中学生と一緒に勉強できた

表8 オンラインで嫌だったこと・残念だったこと

中学生(n=34)	大学生(n=9)
・音声途切れること	・気軽な分、自分の責任感がやや低かった
・参加者が少なかったこと	・一対一で会話できるチャンスが少なかった
・時間帯的に参加できない時があった	・書いた説明したいときに難しかった
・チャットに文字を打つのが大変だった	・生徒一人ひとりに十分な対応ができなかった
・もっと会話をしたかった	・関係づくりが難しかった
・発言しにくかった	・質問しづらかったのでは
・わからないところが聞けなかった	
・各教科の先生がいたらよかった	
・人に聞くのが嫌だった	
・落ち着けなかった	

表9 参加者を増やすためにどんな工夫が必要か

中学生(n=34)	大学生(n=9)
	・大学の公式SNSを作成して入学時にスマホに入れてもらうのはどうか
・放課後の時間帯などがやりやすいと思った	・勉強会の中身がある程度決まっている回もあると目的を持って参加できる人もいかもしれない
・一人ひとりが意識を持つことが大事だと思う	・活動の意義をより深く知ってもらう
・呼びかける	・活動日時などの確定している情報ははっきり伝える
・どのようなものかを実感したらいいと思う	・1時間ではちょっと短かったかもしれない
・いつもどんな雰囲気で作っているのかを知ってもらおう	・活動の様子を写真などで紹介すると具体的に伝わるのでは
・集まりやすい時間帯にした方がいい	・大学生には最初にもう少し事前情報を提示できたらよかったかもしれない
・休日にする	・勉強に入る前にお話ができるような時間がとれるとより気軽かつ親密な関係でできるのでは
・勉強に関するクイズをしたりする	・時間や案内など具体的に案内ができた方がいい
・面白くする	・参加者同士のつながりをうまく活用する
・友達を誘う	・プロジェクトのスタンスが学習支援か心のケアか、もっとはっきりさせた方がよかったのでは
	・生徒が聞きたい質問を事前に集計したり、教える側が把握できたらいいのでは
	・中学生が教えてもらいたい内容を事前に教えてもらうと双方に目途が立つかもしれない
	・曜日、時間帯の選択肢が多くあつたら

#### 4) 今後に向けての改善点

【参加者を増やすためにどんな工夫が必要か】という質問について得られた感想を集約したものを表 9 に示した。中学生では「放課後の時間帯などの方がやりやすいと思った」「集まりやすい時間帯にした方がいい」といった、活動時間帯に関する意見や、「どのようなものかを実感したらいいと思う」「どんな雰囲気で行っているのかを知ってもらおう」「勉強に関するクイズをしたりする」「面白くする」といった、参加しやすさに関する意見が挙げられた。活動時間帯については、先に述べたように中学生それぞれの居住地や休日の過ごし方の状況を把握しきれなかったことが反省点として挙げられよう。また活動への興味をより喚起する工夫を行うことも有効であると考えられる。

一方の大学生からも「活動日時などの確定している情報をはっきり伝える」「勉強会の中身がある程度決まっている回もあると目的を持って参加できる人もいるかもしれない」「時間や案内など具体的に案内ができた方が良い」といった、活動の見通しを示すことへの意見が目立った。また、こうした意見は大学生側の参加を増やすためにも必要であると考えられた。さらに、「プロジェクトのスタンスが学習支援か心のケアか、もっとはっきりさせた方がよかったです」といった意見もあり、参加した大学生が自分の立場に戸惑いを覚えていたと推測される意見もあった。こうした取り組みの際に大学生側に「気軽に」参加してもらうために、事前にどの程度の情報を提示し、また可能な範囲で学習支援に携わってもらうことが「効果的」となるのか、活動の目的・意義や枠組みそのもののあり方について、多くの示唆が得られた。

#### 6. おわりに

本報告では、教育に係る支援のあり方について検討し、学習支援方法の一つとしてオンラインによる学習支援を実施することとした。実際に教員研修や学習支援の準備、運営を行い、オンライン学習支援を実施した場合の利点や問題点について明らかにした。以下に得られた結果を示す。

- 1) 令和2年7月豪雨だけでなく、災害が頻繁に生じ、かつどこでも起こり得る状況であることから、学校安全、防災教育は重要であり、それらを実施・維持するためには教職員の体制作り、委員会等が必要である。特に、円滑な運用に関する行政との調整などのコーディネーターが重要で、教員がコーディネーターの役割を果たしていた。この役割作りを日頃からすることが重要である。
- 2) 学生のボランティア体制によるオンライン学習支援には「場所を問わず気軽に参加できる」などの参加しやすさに有効な点があった。ただし、「コミュニケーションが難しい」、「説明するのが難しい」などのネットワーク利用での課題や活動時間帯への要望などがある。
- 3) 本活動の主たる目的は「学習支援の場の提供」であったが、この目的と学生の考えにずれがあり、学生による主体的活動へ導きがなかったことが残念である。活動への興味をより喚起する工夫を行い、学生に対しては事前に十分な活動目的の提示などが必要である。

#### 参考文献

- 1) 内山庄一郎、檀上徹：令和2年7月豪雨による熊本県人吉市および球磨村渡地区の洪水被害の特徴 —2020年7月9日調査速報 第1版—, 防災科学技術研究所調査速報 2020
- 2) 菅磨志保・山下祐介・渥美公秀（編著）災害ボランティア論入門 弘文堂 2008
- 3) 八ッ塚一郎・永田素彦：変革と発見としてのコミュニティ復興。藤森立男・矢守克也（編著），復興と支援の災害心理学 大震災から「なに」を学ぶか。福村出版 2012
- 4) 日本精神医学会：DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院 pp.277-282 2014
- 5) 大塚芳生・田上法子・富永良喜，平成28年（2016年）熊本地震後における心のケアと防災教育で活用する小学生版ストレス尺度の検討，日本災害復興学会論文集 No.16, pp.47-52 2020
- 6) 大塚芳生：心のケア合同研修会 球磨村教育委員会 [https://es.higo.ed.jp/ishouchi/blogs/blog\\_entries/view/51/00f5f38c7b1ed7a004915a60c6c9e067?frame\\_id=68](https://es.higo.ed.jp/ishouchi/blogs/blog_entries/view/51/00f5f38c7b1ed7a004915a60c6c9e067?frame_id=68) 令和3年8月29日取得
- 7) 大塚芳生：命と防災を考える集会 八代市立八竜小学校 [https://es.higo.ed.jp/hachiryues/blogs/blog\\_entries/view/38/fa675250ce061f0f0d453484b618a63b?frame\\_id=43](https://es.higo.ed.jp/hachiryues/blogs/blog_entries/view/38/fa675250ce061f0f0d453484b618a63b?frame_id=43) 令和3年8月29日取得
- 8) Zoom Video Communications, Inc.: <https://zoom.us/> 令和3年9月10日取得
- 9) 文部科学省：GIGA スクール構想の実現について，[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/index\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm) 令和3年9月10日取得